

真宗における空無我

The Buddhist schools differed among themselves to a great degree; they have, however, one thing in common -- the denial of substance (atman).

T.R.V.Murti, "The Central Philosophy of Buddhism"

仏教各宗派は相互にかなりの程度異なっているが、ひとつだけ共通点がある。すなわち実体（アートマン/我）の否定である。

「無我」への誤解

「我執をすてる」「自己主張をしない」「己を捨てて他（全体）に奉仕する」...etc
これらはすべて「無我」とは関係ない。（我執=ahamkriṭiḥ）

「我」（アートマン）とは「人間の内に存在して考えや行動、知覚などの一切を支配し、肉体が減んでも生き残って輪廻し続ける実体・靈魂・靈我・個人原理」のこと。したがって、「無我になる」というのは無意味であり、もともと無我であって、それに目覚めるのが智慧。

「空」への誤解

「空」への誤解は、二つの原因がある。

(1) 「空」（śūnya：欠けている, void, empty）は形容詞であり、名詞化される時は "śūnyatā" (emptiness) といい、「空性」（空であること）と訳される。しかし漢訳仏典においてはしばしば厳密に訳されず、名詞も形容詞も「空」ですましてしまったことにより、本来は形容詞としての「空」が名詞として、すなわち何らかの実在的なものと誤解されるようになった。

(2) 「空」を老荘思想で言う「無」で以て解釈、ないし同一視しようとしたこと。（無為自然）

すなわち、本来は「Aは空である（=Aは実体をもたない）」という命題は仏教であるが、「空はXである」（X=無、無限、宇宙、自然、生命、一切、現象etc）という命題は仏教ではない。このような「空」の実在視は、やがて「真如」（一切を生み出す根源、すべてに内在し、すべてを超越する永遠なる絶対的実在）とか「真如縁起」（万物は真如から縁によって生起したものとする考え方）という思想を生み出した。これが如来蔵思想と結びつくと、次のような言明になる。

「人間は、空の現れだ。外からの客塵によって汚されているだけで、本来清浄である。賢しらな努力を捨て、はからいを止め、あるがままに身を任せよ。そうすれば本来の空の働きのままに、絶対自由の境地に遊ぶことができる。それが解脱だ。」
つまり、超越的な「空」と一体になることで、「我」をも超越的なものにする、梵我一如の焼きなおし、釈尊の無常=無我=縁起とは、正反対の考えが生まれることになった。

釈尊における「空」

「常によく気をつけ、アートマンに固執する見解を打ち破って、世界を空なりと観ぜよ。」（スッタニパータ1119）

龍樹における「空」

「滅することなく生じることなく、断滅でなく常住でなく、同一でなく別異でなく、来ることなく去ることなく、戲論が寂滅して至福である、そのような縁起を説示したまえる世尊に、諸々の説法者の中の最も優れた方として、**私は敬礼する**」（中論偈・帰敬偈）

八不中道（不生、不滅、不断、不常、不一、不異、不去、不来）＝実体を否定し、すべては縁起である、とする「否定の思想」。不生不滅の何ものかがある、という意味ではない。

「およそ縁起であるもの、それをわれわれは<空であること>と説く。それは<縁つての仮設>であり、それが<中道>である。」（中論偈24-18）

「もし空でない何ものかが存在するならば、空である何ものかが存在しよう。しかし空でない何ものも存在しないから、どうして空であるものが存在しようか。」（中論偈13-7）

以上より、次の三点を確認する

1. 龍樹にとって、釈尊の仏教（根本仏教）とは縁起説である。
2. 龍樹の説く空とは、釈尊の説く縁起（無常、無我）に他ならない。（ただし、両者に相違がないわけではない。時間的縁起と論理的縁起の違い）
3. 龍樹の説く空とは存在のことではない（空復亦空）

空の世界観と浄土真宗

空の世界観は、「何ものも実体（自性）をもたず、縁起であり無常である」ということだから、自己（確かな自我があって死後もそれが残るという思い、自分の思想、自分の所有物など）および周囲（自分の所有でないものを所有したいという欲求）への執着をはなれることを目指す。

浄土真宗において、この志向は直接的なものではない。しかし、二種深信（特に機の深信）の徹底は、結果として空の世界観が志向するものと一致する。

「煩惱具足の凡夫、火宅無常の世界は、よろずのこと、みなもって、そらごとたわごと、まことあることなきに、ただ念仏のみぞまことにておわします」（歎異抄）
これは「世間虚仮、唯仏是真」ということである。

しかし... 「一切が空」というからには、「仏もまた空」であって、仏のみを例外とする理由は何か？（ここで<仏>を、涅槃、覚り、法...etcとおきかえてみてもいい）

「それ（如来に絶対的に帰依すること-山口註）は仏教からの逸脱ではあるけれども、本願の中に誓われてある逸脱」「見守るべき逸脱」（藤場俊基『親鸞の教行信証を読み解く』Ⅲ）

「浄土の教えは、本尊を仮設することによって、空の思想が言い表そうとしたことを簡単に実現してしまったわけです。本尊以外の一切のものは虚仮であると。一つの例外を立てることによって、一切のものを相対化していく原理が成立したのです。」
(同上書 I)

「須菩提言さく、『何等かこれ不生・不滅にして変化にあらざる』と。仏の言さく、『誑相なき涅槃、この法変化にあらざる』と。『世尊、仏自ら説きたまうがごとき、諸法平等にして声聞の作にあらず、辟支仏の作にあらず、もろもろの菩薩摩訶薩の作にあらず、諸仏の作にあらず。有仏・無仏、諸法の性、常に空なり。性空なる、すなわちこれ涅槃なり。いかなぞ涅槃の法、化のごとくにあらざる』と。仏、須菩提に告げたまわく、『かくのごとし、かくのごとし。諸法は平等にして、声聞の所作にあらず、乃至性空なればすなわちこれ涅槃なり。もし新発意の菩薩、この一切の法みな畢竟じて性空なり、乃至涅槃もまたみな化のごとしと聞かば、心すなわち驚怖しなん。これ新発意の菩薩のために、ことさらに、生滅のものは化のごとし、不生不滅のものは化のごとくにあらざるをと分別するをや。』」(大品般若経、聖典320頁)

⇒「新発意の菩薩」=われわれ自身に置き換えてみる

立川武蔵批判

「この時代(鎌倉・室町時代 山口註)の仏教において、「空」の本質的側面は機能しているのである。その本質的側面とは徹底した自己否定である。法然や親鸞の浄土教にあっては、自己否定の実践として「はからいを捨てること」が強調される。(中略)このはからいを捨てることは、龍樹の空の思想でいうならば、言葉を否定していく作業であった。」(『空の思想史』)



浄土真宗において、「はからいを捨てることが強調される」のは本当だろうか？はからいを捨てようと意欲すること自体がはからいなのだから、これは堂々めぐりにしかならない。また、龍樹は言葉を否定したのではなく(何のために膨大な著作を残したのか？)、言葉の虚構性を指摘した。浄土真宗において大切なことは、はからいを捨てるようともがくことではなく、言葉を大切に聞法を重ねること、そしてそれによって自己否定を実践すること。

小川一乗批判

「煩惱、生死、三悪趣の世界は実体として存在しない(空である)。この空という真実が明らかになった時に本願の成就があるが、私たちの分別(実体論的発想)がその成就を妨げている。実体論的な発想が打ち破られたのが浄土である。」(『大乘仏教の根本思想』取意)



<実体論的発想>しかできない凡夫のために説かれたのが西方極楽浄土。小川氏は

むしろ<密厳浄土>的な発想でしかない。

「(法蔵菩薩の)物語が仏教である以上は、釈尊の縁起、龍樹の空、そういう仏教の基本思想でもってそのことを教学的におさえておく必要がある。」

「生死を生きている非本来的な自己である仮としての『私』と即の関係にある、生死即涅槃としてあり得ている涅槃としての本来的な自己への目覚めというものがないければ、本願を信じるということは基本的に起こり得ない。」(同上書)



小川氏は、生死=非本来的自己、涅槃=本来的自己、と規定した上で、両者が本来空であるが故に即の関係にあり、本願成就も本願への信仰もその上にもみ成り立つ、と述べる。しかし、これは論理的には支離滅裂である。

- 1.自己を「非本来的」「本来的」と分類する基準や根拠がない(恣意的判断?)
- 2.本来空であるがゆえに即、であるならば、空でないものはないのだから、一切が即になり、「一切即一、一即一切」という華嚴経的世界観に陥るしかない。そしてこれは、ギリシア哲学の一元主義(一にして全, hen kai pan)に他ならない。

浄土は空性の世界

「天親菩薩の願ずるところの生は、これ因縁の義なり。因縁の義のゆえに仮に生と名づく。凡夫の、実の衆生、実の生死ありと謂うがごときにはあらず。」(浄土論註)

「浄土というのは空性の世界、悟りの世界なのです」(早島鏡正)

これは何を言わんとするのか?

△浄土は空である=浄土には実体が欠けている⇒穢土にも実体が欠けている

×浄土は無である=浄土は存在しない⇒穢土は存在する

◎浄土は空性の世界である=浄土は、本来空であることが明らかに認識される世界である? ⇒穢土は実体性の世界である=穢土は、(本来存在しないはずの)実体性に囚われ迷わされる世界である

司馬遼太郎

仏教にあっては、一切は空である。あわせて、万物は轟々と輪廻する。従って、初期仏教には天国も極楽もなかった。悟りをひらく以外に、光明はなかったのである。

釈迦の没後、数百年経って、様子が変わった。インド文明圏の一角で成立したらしい『阿弥陀経』が、キリスト教が天国を説くようにして、極楽の存在を説きはじめていたのである。本来の釈迦の仏教とは別系列の観があるといっている。(中略)

以上、法然、親鸞、一遍をみていると、非仏教のようにみえて、釈迦の仏教にもっとも近かったことがわかる。

親鸞の流れから、妙好人という、禅の悟りそのままの精神像が出現したのも当然なことで、結局は、三人にとっての阿弥陀如来が、空の別名であったのである。(『この国のかたち』)